



Title	環境問題に関する意識と行動
Author(s)	後藤, ヨシ子; 八木, 里佳
Citation	長崎大学教育学部紀要. 教科教育学. vol.36, p.75-82; 2001
Issue Date	2001-03-28
URL	http://hdl.handle.net/10069/5902
Right	

This document is downloaded at: 2019-06-16T03:00:30Z

環境問題に関する意識と行動

後藤 ヨシ子* 八木 里佳*

(平成12年10月31日受理)

The Consciousness and Behavior on the Environmental Issues

Yoshiko GOTO, Rika YAGI

(Received October 31, 2000)

はじめに

今日、環境問題に「関心をもつ」人は多く、意識の高まりはみられている反面、環境問題を解決するために「何かを実行している」と答える人はかならずしも高くないのが実情のようである。環境問題に関して、自分のライフスタイルのどの部分が大きく環境に影響を与えているかが本当に正しく理解することができれば、おのずとどのように環境にやさしい行動をすればよいかかわかるのではないかと考える。今回は、幼児をもつ母親（一般主婦）と大学生の環境問題に関する意識と行動について検討を加えた。

調査方法

対象は、長崎市内幼児（3～5歳）をもつ母親（一般主婦）319名、および長崎大学学生（1～3年次生）366名。調査内容は、環境問題について身近に危険があると感じる事柄や意識して行動していくことの難しい理由、さらに環境汚染、省エネルギー、ゴミ減量化に関する考えや行動について、具体的な項目を示し、質問紙法により回答をえた。

実施時期は、平成11年7月～10月である。

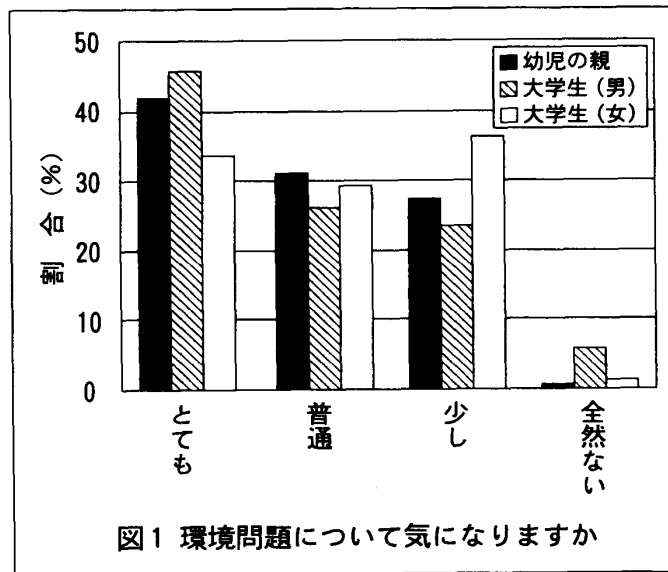
調査結果

1) 現在の環境問題について気になる程度について

まず現在の環境問題について、どの程度気になっているかをたずねた結果、「とても気になる」という回答は、全体の4割を占めていた。なかでも男子学生が最も割合は高く46%、次いで幼児をもつ母親41.7%、そして女子学生の33.6%の順であった。一方「少し気になる」の割合は、全体としては約3割であるが、男子学生の23.3%に対し、女子学生は36.1%である。同じ大学生でも環境問題に対する受けとめ方には、個人差を含め、男女間に若干相違がみられた。全体的には環境問題について「全然気にならない」と回答した割合は1.6%と、ごくわずかであった（図1）。昨今新聞、テレビ、雑誌等にみる環境問題に関する報道は以前よりも増して多く、環境への関心とともに、その悪化に懸念をいだいている

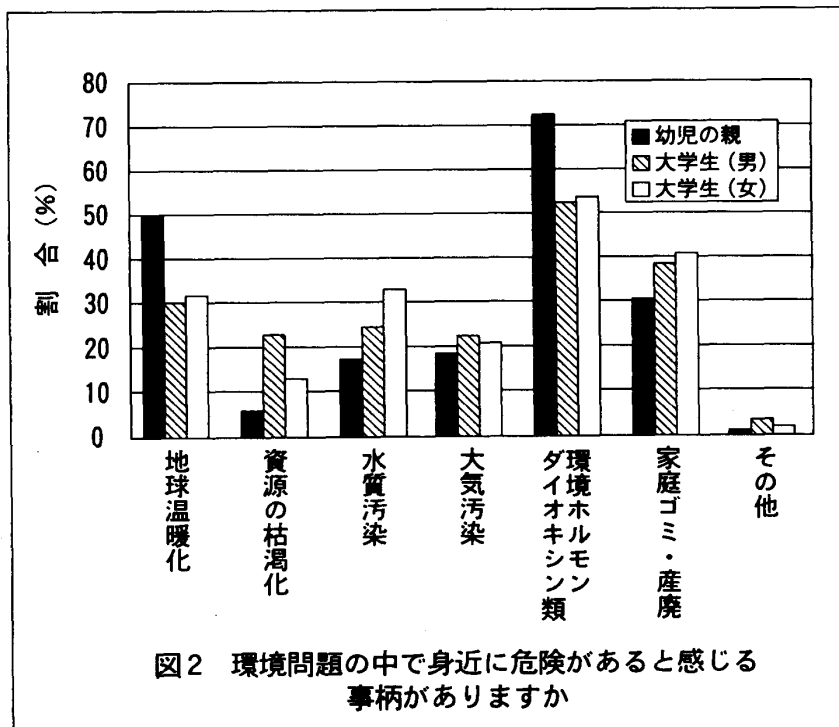
*長崎大学教育学部家政教育講座

といえよう。



2) 環境問題の中で身近に危険があると感じている事柄について

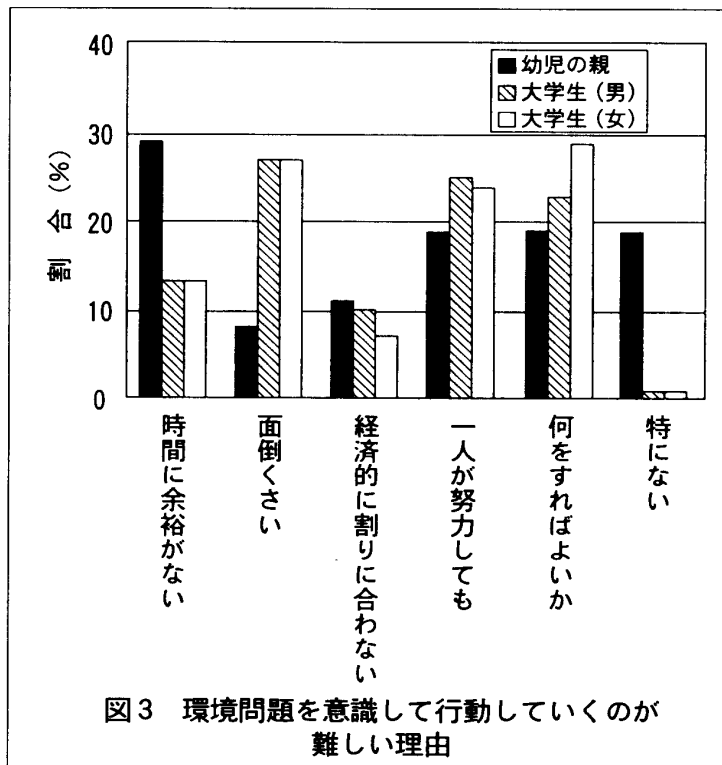
現在の環境問題の中で身近にどんな事柄に対して危険を感じているか。私たちの日常生活と直接関連の深いと思える環境問題として、次の6つの項目を取り上げた。つまり地球温暖化、資源の枯渇化、河川や湖の水質汚染、大気汚染、ダイオキシン類・環境ホルモン、家庭ゴミ問題・産業廃棄物をあげ、その中から特に項目中2つ選択（複数回答）してもらった。それぞれの環境問題に多少なりとも身近に危険を感じているものの、第一位は「ダイオキシン類・環境ホルモン」であった。発育途上にある幼児をもつ母親にとっては有害化学物質に対する懸念は強いといえ、7割の高さを示していた。大学生においても5割の学生がこの項目をあげていた。かって、歴史上にみる枯れ葉剤のもたらした胎児発育障害や



健康障害の事実は、ダイオキシン類のもつ毒性の強さ、発がん性、催奇性等への恐怖感を抱かせた。また他の化学物質「内分泌攪乱化学物質」いわゆる「環境ホルモン」に対する生態系への影響、胎児発育への懸念等も、今日以前にも増して多く報道されるようになり、生命や健康を脅かし始めていることの危機感が大きく反映されているといえよう。次いで幼児をもつ母親は、「地球温暖化」をあげ、大学生は男子・女子学生ともに「家庭ゴミ、産業廃棄物」をあげていた（図2）。

3) 環境問題の解決に意識して行動していくのが難しいと思う理由について

環境問題への関心はあっても行動していくうえで難しいと思う理由について、5項目をあげたが、その中で、幼児をもつ母親は「時間に余裕がない」（28.8%）が最も高い理由であった。一方大学生は「面倒くさい」（27.0%）が最も多く、そして「環境のために何をすればよいかわからない」、「一人ぐらいが努力しても本当に効果があると思えないから」という理由が上位3位にあり、幼児をもつ母親よりも高い割合を示していた。



環境問題の重要性は頭では理解できていても、なかなか行動に結びついていかないところに課題があるといえよう。「意識」と「行動」のギャップをどう埋めるか。また環境問題の解決には、一人ひとりの行動がいかに大事であるかという認識をもつこと。そして「環境のために何をすればよいかわからない」という回答にたいしても、幼少時から、身近かな生活行動と環境とのかかわりについて考える環境学習、環境教育の大事さがあるようである。一方、「経済的に割りにあわない」という理由は全体の1割程度であった。また、行動するうえで難しい理由は「特にない」という回答は、母親の約2割にみられている。すでにライフスタイルの中に取り組み行動しているということであろう（図3）。

4) 環境汚染に関する考え方や生活行動について

環境問題と自分のライフスタイルを結びつけ、どのような環境に配慮した行動を起こしていくか、まずは少しでも環境汚染への可能性のある事柄にたいして、どのような考えをもつかが大事であろう。前述の2)において、特に身近に危険を感じる環境汚染のなかで第一位にあった「ダイオキシン類・環境ホルモン」に関して質問をした。「ダイオキシン類は、塩素を含む物質でプラスチックや紙などを焼却した時に発生する」という問いでは、

「そう思う、少し思う」と回答した割合は、全体の75.3%、やや大学生に比べ幼児をもつ母親の方がその意識は強く高い値であった。他方「そう思わない、わからない」という回答も、全体の24.7%あることは見逃せない。次に「環境ホルモンを今より減らせるとしたら個人の出すゴミや産業廃棄物を減らすことが大切と思う」という問いでは、「そう思う、少し思う」と回答した割合は、全体の80.6%、他方「そう思わない、わからない」という回答は、全体の19.4%、やや大学生の方が幼児をもつ母親よりもその値は高めであった。

表1 環境汚染に関する考え方と生活行動

ダイオキシン類は塩素を含む物質でプラスチックや紙などを焼却した時に発生する					
	そう思う	少し思う	そう思わない	わからない	計
幼児の親	226(70.8)	29(9.1)	13(4.1)	51(16.0)	319
大学生(男)	89(59.3)	18(12.0)	6(4.0)	37(24.7)	150
大学生(女)	127(58.8)	27(12.5)	11(5.1)	51(23.6)	216
計	442(64.5)	74(10.8)	30(4.4)	139(20.3)	685

環境ホルモンを今より減らせるとしたら個人の出すゴミや産業廃棄物を減らすことが大切					
	そう思う	少し思う	そう思わない	わからない	計
幼児の親	165(51.7)	107(33.5)	15(4.7)	32(10.0)	319
大学生(男)	61(40.7)	49(32.7)	19(12.6)	21(14.0)	150
大学生(女)	87(40.3)	83(38.4)	14(6.5)	32(14.8)	216
計	313(45.7)	239(34.9)	48(7.0)	85(12.4)	685

洗濯は合成洗剤でなく石けんを使用している					
	いつも	時々	いいえ	その他	計
幼児の親	29(9.1)	58(18.2)	227(71.1)	5(1.6)	319
大学生(男)	10(6.7)	12(8.0)	116(77.3)	12(8.0)	150
大学生(女)	14(6.5)	15(6.9)	185(85.6)	2(0.9)	216
計	53(7.7)	85(12.4)	528(77.1)	19(2.8)	685

食品包装用のサランラップやクレラップはよく使用している					
	いつも	時々	いいえ	その他	計
幼児の親	227(71.2)	70(21.9)	20(6.3)	2(0.6)	319
大学生(男)	62(41.3)	40(26.7)	39(26.0)	9(6.0)	150
大学生(女)	140(64.8)	59(27.3)	15(6.9)	2(0.9)	216
計	429(62.6)	169(24.7)	74(10.8)	13(1.9)	685

次にライフスタイルにおいて、どのように環境に配慮した行動をしているか、身近な生活行動としての質問を若干用意した。洗剤に関して、「洗濯は合成洗剤でなく石けんを使用している」という問いでは、「いつも、時々」と回答した割合は、全体の20.1%とかなり低い値であった。幼児をもつ母親では27.3%、4人に1人程度、一方大学生では10%強であり少ない。環境に対する洗剤は、合成洗剤のほうが石けんよりBOD(生物学的酸素要求量)

値が低く、一見環境にやさしそうに思える。しかし合成洗剤は生物分解が難しいため、BOD値としては高くないが、逆に生態系には有害なものが多い。水質汚染と有害化学物質の両面からみると環境への配慮は石けんの方がよりやさしいと考えられている。

次に、焼却時のダイオキシ類の発生が問題となる塩化ビニールの食品用ラップなど、身近に使用している有機塩素系化合物の製品について、「食品包装用のサランラップやクレラップはよく使用している」という問いでは、「いつも、時々」と回答した割合は、意外に高く、幼児をもつ母親および女子学生においては9割をこえていた。他方「いいえ」と回答した割合は、幼児をもつ母親においても、わずか6.3%であった。環境にとっては、ポリエチレン系の非塩ビ系が望まれている。男子学生の「いいえ」の26%は、常に調理はしていない結果であろうと考えられる。(表1)。

表2 省エネルギーに関する考え方と生活行動

通学や買い物は自家用車を避けて公共のバス、電車を利用する					
	いつも	時々	いいえ	その他	計
幼児の親	122(38.2)	104(32.6)	89(27.9)	4(1.3)	319
大学生(男)	48(32.0)	36(24.0)	60(40.0)	6(4.0)	150
大学生(女)	112(51.9)	38(17.6)	63(29.1)	3(1.4)	216
計	282(41.2)	178(26.0)	212(30.9)	13(1.9)	685

いつも早寝早起きを心がけている					
	いつも	時々	いいえ	その他	計
幼児の親	112(35.1)	134(42.0)	69(21.6)	4(1.3)	319
大学生(男)	21(14.0)	32(21.3)	94(62.7)	3(2.0)	150
大学生(女)	35(16.2)	61(28.2)	115(53.2)	5(2.4)	216
計	168(24.5)	227(33.1)	278(40.6)	12(1.8)	685

テレビを1週間に1日見ない日をつくっている					
	いつも	時々	いいえ	その他	計
幼児の親	7(2.2)	16(5.0)	290(90.9)	6(1.9)	319
大学生(男)	11(7.3)	18(12.0)	117(78.0)	4(2.7)	150
大学生(女)	20(9.3)	13(6.0)	178(82.4)	5(2.3)	216
計	38(5.5)	47(6.9)	585(85.4)	15(2.2)	685

家庭(実家)では太陽熱温水器を利用している					
	いつも	時々	いいえ	その他	計
幼児の親	30(9.4)	8(2.5)	273(85.6)	8(2.5)	319
大学生(男)	25(16.7)	11(7.3)	99(66.0)	15(10.0)	150
大学生(女)	40(18.5)	13(6.0)	154(71.3)	9(4.2)	216
計	95(13.9)	32(4.7)	526(76.8)	32(4.7)	685

5) 省エネルギーに関する考え方や生活行動について

省エネルギーに対して身近な生活行動として考えられる事柄について、いくつかの質問を用意した。「通学や買い物は自家用車をさけて公共のバス、電車を利用する」という問いでは、「いつも、時々」と回答した割合は、幼児をもつ母親および女子学生では7割、男子学生では約6割であるが、かなり高い割合で公共の乗り物を利用しているのがわかる。環境に対しては、例えば自家用車30台が道路を走る場合と、30人乗りの電車・バス一台が走るのでは、交通渋滞の問題のみでなく、二酸化炭素の排出量等の削減においても電車・バスの方がより環境にやさしいということがうなづけよう。

「早寝早起きを心がけている」という問では、「いつも、時々」と回答した割合は、幼児を持つ母親は77%という高さである。一方大学生では、男子学生は35.3%、女子学生44.4%であり、大学生の生活リズムは遅寝遅起が多いという実情にある。環境に対しては、早寝早起の生活では、日中の生活時間が多いほど、照明を必要とする時間が少なく、結果的には電気エネルギーの使用を抑えることにつながるといえる。同じく電気消費量に関して、「テレビを1週間に1日見ない日をつくっている」という問では、「いつも、時々」と回答した割合は、とても少なく全体の12.4%であった。大学生よりも主婦である幼児をもつ母親の方が「いいえ」の割合が高かった(90.9%)。「家庭(実家)では太陽熱温水器を利用している」という問では、「いつも、時々」と回答した割合は、全体の18.6%であった。化石燃料だけでなく太陽エネルギーを直接利用することが、大気汚染や二酸化炭素の発生を抑えることにつながると考えられるが、利用には、設備に少々費用がかかり、また設置場にも制限があるため、まだ十分に普及はしていないことが考えられる(表2)。

6) ゴミ減量化に関する考え方や生活行動について

廃棄物の発生抑制、資源保護の面から身近な生活行動についての質問を用意した。「買い物には買い物袋をもっていく」という問では、「いつも、時々」と回答した割合は、意外と少なく全体の25.4%であった。幼児をもつ母親では36.4%ほぼ3人に1人、大学生では男子学生14%、女子学生17.1%と少ない。

次に再利用に関して「使わない品物はガレージセールやバザーにだしている」という問では、「いつも、時々」と回答した割合は、幼児をもつ母親では54%と半数をこえている。

一方大学生においては2割程度にとどまっていた。他方「再生紙などリサイクル商品を購入している」という問では、「いつも、時々」と回答した割合は、かなり高く、大学生では約8割、幼児をもつ母親では約7割が購入している実情にあった。

さらにゴミ減量化における、ゴミ分別の堆肥化の実情について、生ゴミである「野菜くず」、「魚肉の骨」そして「草や木の葉」について尋ねた。「野菜くず」と「魚肉の骨」のいずれも、全体の17%が堆肥化されており、残りは燃やせるゴミとして分別され、焼却されていた。そして「草や木の葉」においては、約3割が堆肥化の状況であった(表3)。

表3 ゴミの減量化に関する考え方と生活行動

買い物には買い物袋をもっていく					
	いつも	時々	いいえ	その他	計
幼児の親	29(9.1)	87(27.3)	197(61.7)	6(1.9)	319
大学生(男)	6(4.0)	15(10.0)	122(81.3)	7(4.7)	150
大学生(女)	7(3.2)	30(13.9)	178(82.4)	1(0.5)	216
計	42(6.1)	132(19.3)	497(72.6)	14(2.0)	685

使わない品物はガレージセールやバザーに出している					
	いつも	時々	いいえ	その他	計
幼児の親	49(15.4)	123(38.6)	144(45.1)	3(0.9)	319
大学生(男)	8(5.3)	13(8.7)	119(79.3)	10(6.7)	150
大学生(女)	9(4.2)	36(16.6)	165(76.4)	6(2.8)	216
計	66(9.6)	172(25.1)	428(62.5)	19(2.8)	685

再生紙などリサイクル商品を購入している					
	いつも	時々	いいえ	その他	計
幼児の親	35(11.0)	185(58.0)	95(29.8)	4(1.2)	319
大学生(男)	29(19.3)	87(58.0)	27(18.0)	7(4.7)	150
大学生(女)	32(14.8)	143(66.2)	37(17.1)	4(1.9)	216
計	96(14.0)	415(60.6)	159(23.2)	15(2.2)	685

ゴミ分別における堆肥化状況			
	野菜くず	魚肉の骨	草や木の葉
幼児の親	33(10.3)	36(11.3)	66(20.7)
大学生(男)	37(24.7)	38(25.3)	47(31.3)
大学生(女)	46(21.3)	44(20.3)	75(34.7)
計	116(16.9)	118(17.2)	188(27.4)

おわりに

環境問題に関する意識はかなり高くもっており、現在の環境問題についても「とても気になる」という回答も4割をこえ、一方「全然気にならない」という回答はわずか1.6%にすぎなかった。特に身近に危険を感じる環境問題の第一位は、昨今の新聞、テレビ、雑誌等で「ダイオキシン類」、「環境ホルモン」という言葉を以前にもまして多く見かけるようになり、しかも生命や健康を脅かす毒性の強さ、生態系への影響等から危機感を強く抱いている結果が示されていた。

しかし環境問題の解決に意識して行動していくうえでの難しさの理由は、幼児をもつ母親は「時間に余裕がない」が第一位であったが、大学生の第一位は「面倒くさい」であった。そして「環境のために何をしてよいかわからない」、「一人ぐらいが努力しても本当に効果があると思えないから」という理由が上位3位であった。環境問題の重要性や危機感を感じていても、なかなか行動にはいたらず、意識とのギャップがかなりあることがわ

かる。環境問題の解決には一人ひとりの行動がいかに大切であるか、一人ひとりの行動を積み上げ、行動の輪を広げていくことがとても大事であることの共通認識をもつこと、そして「環境のために何をしてもよいかかわからない」という回答にたいしても、幼少時から身近な生活行動と環境とのかかわりについて考え行動する環境学習、環境教育の重要さがいえる。

環境汚染、省エネルギーおよびゴミ減量化に関する考えや行動について、身近かな生活行動をとりあげ環境への配慮について、今回いくつかの質問を用意した。例えば、その中で「合成洗剤でなく石けんを使用する」、「買い物袋を持参する」等の項目においても、意外と取り組みが少なく、便利さについて慣れてしまった日常行動をかえることが容易でないこと。また「塩ビ系のサランラップやクレラップの使用」等についての割合の高さは、焼却時に有害ガスの発生することの情報が十分に伝わっていないことも考えられよう。

環境問題の解決にとって、基本的には適切な情報とゴミ減量化およびゴミ分別をきちんとすること、また省エネルギーに配慮する身近な生活行動が、環境問題の解決につながり、それはダイオキシン類等の有害化学物質の発生の削減や環境に配慮した結果へつなげると考えられる。

日々環境に配慮した身近な生活行動はまだ多々あげられよう。今回は質問の数は限られていたが、身近かな生活行動のどの部分が環境とどのように結びついているか、一人ひとりの意識から行動へは本当に理解することから行動へおのずと結びついていけるものと考ええる。

引用・参考文献

- 高月 絃：自分の暮らしがわかるエコロジー・テスト 講談社, 1998.
高山 三平：ダイオキシンの恐怖 PHP, 1998.
平田 裕次：どうすればいい環境ホルモン Bauhaus Mook, 1998.
糸山 景大ら：環境問題に関する長崎市民の意識調査 長崎大学教育学部紀要 教科教育学No. 33, 63-68, 1999.
森 千里：環境ホルモンの健康影響 公衆衛生, Vol.62 No.7, 468-472, 1998
内山 巖雄：ごみ焼却とダイオキシン 公衆衛生, Vol.62 No.7, 473-526, 1998